

広島大学学術情報リポジトリ
Hiroshima University Institutional Repository

Title	現代朝鮮語における比況表現について (2) : tasip' i
Author(s)	深見, 兼孝
Citation	ニダバ , 15 : 38 - 42
Issue Date	1986-03-31
DOI	
Self DOI	
URL	https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00047174
Right	
Relation	



論文

現代朝鮮語における比況表現について (2)

— tasip 'i —

深 見 兼 孝

はじめに

*tasip'i*は主として動詞の語幹に付くが¹、大まかに言って二つの用法を持つ²ようである。次の例を見られたい。

1 po tasip'i wančōnhata.³
みる かんせんだ

この二例のうち、比況表現の文と言えるのは2である。2では、apɔ̄ci ‘父’のkɔl- ‘歩く’ さまがnal- ‘飛ぶ’ さまに喩えられているのである。一方、1は「見てのとおり完全だ。」といった意味で、何かがwanɔ̄nha- ‘完全’ なさまがpo- ‘見る’ さまに喩えられているのではないので、この文を比況表現の文と言うことはできない。本小稿では、2のような比況表現の文に用いられるtasi p‘iに限って、それが用いられる条件について考えてみることにする⁴。

1 主語との関係

tasip'i は節も句も導くことができるが、節の場合はその節の主語、句の場合は（多くの場合、文全体の主語と同じであるが）その句内の動詞の意味上の主語に、無生物を表わす名詞が来ることはないようである。次の例を見られたい。

3 * yōnkika ki tasip'i mit'patakūl hūlūko issta.

4 ?palo kwisč̥n̥ulo h̥l̥u tasip'i yolanhatōn tolangmul
ちょうど かみもとへ ながれる タシピ'イ オオカツト ナラムル

solika mələčyօ kassta.
ソリカ モルチヤ カッタ。

5	kulõngika	nal	<u>tasip'i</u>	kiõ	oko	issõssta.
	へびが	と		はって	て	

上の例はいずれもtasip'iが句を導いている例であるが、その句内の動詞の意味上の主語は、3がyõnki 'けむり'、4がitolangmul soli '溝の音'、5がkulõngi 'へび'である。これらのうち、有性物を表わすのは5のkulõngi 'へび'で、この5が受け入れ可能な文なのである。

3のtasip'iが導く句内の動詞ki- 'はう'は、本来動作動詞であろうと思われるが、無生物を表わす名詞yõnki 'けむり'が主語である、この3が三例中もっとも受け入れがたい。tasip'iは（抽象物を含め）物を人に喻える擬人法には用いられないのである。

ところで、tasip'iの導く節の主語、または句の意味上の主語が無生物を表わさないということは、必ずしもその節、または句の動詞が動作動詞でなくてはならないということを意味しない。次の例を見られたい。

6	kõnõn	čule	mukkyõsõ	kküllýõ	ka	<u>tasip'i</u>	õtum	soke
	かねは	おとこ	しばられて	ひかれて	いく		やみ	なかに

	salacyõ	põlyõssta.
	せて	しまった

7	nanõn	hõmulõci	<u>tasip'i</u>	kõ	čalie	čučančassta.
	わたしは	くする		その	ばへ	すわりこんだ

6、7とも受け入れ可能な文であるが、前者のküllýõ ka- '引かれて行く'、後者のhõmulõci- 'くずれる'は動作動詞とは言えない。なぜなら、これらはそれぞれの主語kõ '彼'、na '私'の意志によって起こる事柄を表わしてはいないからである。

2 tasip'iが結合した動詞の表わす事柄と、文末の動詞が表わす事柄の時間的関係

現代朝鮮語では、文末の動詞が文（單文の場合）または主節（複文の場合）の述部の主要構成素のひとつである。tasip'iが結合した動詞の表わす事柄と、文末の動詞が表わす事柄は、時間的に同時と考えられる。つまり、tasip'iを含む文の表現意図は、文末の動詞が表わす事柄を、それと同時に発現していると仮定される事柄に喻える、というものである。次の例文を見られたい。

8	* kõ	yõčaka	čokolilõl	põsõ	hõntülimyõ	mič'i	<u>tasip'i</u>
	その	おんなが	チヨゴリセ	ぬいで	ふりながら	くるう	

akõl	ssõssta.
あらんかぎりのこえできけんた	

9 * kūnyōnūn čuk tasip'i čamtūlō isssta.
かのじよは しゅ たシピ'イ カムトゥル イル

上の二例はいずれも受け入れがたい文であるが、tasip'iが結合しているmič'i- '狂う' (8)、čuk- '死ぬ' (9) は、次の例文が示すように、単純現在形では発話時点でその表わす事柄が発現していることを表わしえない。

10 * (今、死んでいる人について) kū salamūn čuknūnta.
あの ひとは チュクンタ

11 * (今、発狂している人について) kū nomi mič'inta.
あの あいづ ミチ'イント

10、11は発話時点で「死んでいる」こと、「狂っている」ことは表わさないが、発話時点より後に「死ぬ」こと、「狂う」ことは表わし得る。これと同じように、例文8、9において、mič'i- '狂う'、čuk- '死ぬ' はそれぞれakčl ssossta 'あらんかぎりの声で叫んだ'、čamtūlō isssta '眠っている' と同時の事柄を表わすのではなく、それより後の事柄を表わすと考えられる⁵。

さらに次の例を見られたい。

12 * nūktäka čapamök tasip'i tōmpyōtūlōsstā.
やまいか とってくう たシピ'イ トーミピョトゥルオッスタ

13 * nanūn kohamilato cilü tasip'i čōnsine himüł čuōsstā.
わたしは どなりでもする チル たシピ'イ せんしんに ヒムル チュオッスタ

この二例も受け入れられない。12のtōmpyōtūlōsstā '飛びかかった'、13のhimüł čuōsstā '力を入れた' は、それぞれ時間的にčapamök- '取って食う'、koham cilü- 'どなる' よりも先に起こるべきものである。言い換えれば、「飛びかかった」は「取って食う」より、「力を入れた」は「どなる」より先、または同時ではあり得ないのである。

一方、次の例文は全て受け入れられる。これらの文では、tasip'iが結合している動詞の表わす事柄と、文全体の動詞が表わす事柄は同時と考えられる。

14 hakyök palp'yolüł pokó čumču tasip'i kippohako issta.
ごうかく はっぴょウキ ポコ おどる たシピ'イ キッポハコ イル

15 sanainūn näpat' tasip'i malhässtā.
おとこは はますてる たシピ'イ マルハッスタ

16	Uk <small>č</small> n	kul <small>č</small>	<u>tasip'i</u>	tomangč'y <small>č</small> ssta.			
	ウクは	ころがる		にげた			
17	k <small>č</small> n <small>č</small> n	yongsčlato	pil	<u>tasip'i</u>	mäkčpsn <small>č</small> n	moksolilo	ip <small>č</small> l
	かれは	ゆるしても	こう		ちからがない	こえで	くちを
		ひもいた					

3 tasip'iが結合する動詞のアスペクト的性格

次の例文を見られたい。

18	* k <small>č</small> n <small>č</small> n	čnčena	čamtčlč	iss	<u>tasip'i</u>	kwamukhata.	
	かれは	いつも	ねむって	いる		ものしずかだ	
19	* k <small>č</small> nyčüi	čamtčn	člkulčn	mač'i	čukč	iss	<u>tasip'i</u>
	かのじよの	ねむった	かおは	あたかも	しんで	いる	
		poy <small>č</small> ssta.					
		みえた					
20	* sanaičüi	sončl	ppulč'iko	mič'y <small>č</small>	iss	<u>tasip'i</u>	tallyč
	おとこの	てき	ふりきって	くるって	いる		はしって
		kasstta.					
		いった					

上の3例において、tasip'iが結合している動詞はいずれも-o iss-によって状態相を表わしているが、受け入れられない。おそらく、tasip'iは状態相を表わす動詞とは結合しないのであろう。先に挙げた受け入れ可能な例文2、5~7、14~17において、tasip'iが結合している動詞は状態を表わしてはいない。

おわりに

以上tasip'iを含む文が成立する条件を考察してきたが、それらが相互にどのような関係にあるのかという核心的問題には今回触れることができなかった。また、これらの条件だけでは処理しきれない事象が存在することも率直に認めておこう。前回と今回の調査から、現代朝鮮語の比況表現文は、それを明示する要素の違いによって微妙なニュアンスの差を生み出しているものと推察されるが、その詳細の解明と併せ、今後の研究に期したい。

注1 「國語大辞典」(李熙昇, 民衆書林1981)によると、tasip'iはiss- ‘ある、いる’、kyesi-(iss-の尊敬語)、øps- ‘ない、いない’、ani- (否定詞)にも結合する。

2 注5参照。

3 注1に掲げた辞典に挙げられている例文である。

4 インフォーマントに広島大学教育学部に留学中の朴和煌君になっていただいた。この場を借りて感謝の意を表したい。

5 次の例文ではtasip'iがøuk- ‘死ぬ’に結合しているが、この文は比況表現の文ではなく、むしろ程度表現の文と解すべきであろう。

a) nanün øuk tasip'i nollasta.
わたしは しゅ おどろいた

øuk-と同様、kiçolha- ‘気絶する’も単純現在形では発話時点で「気絶している」ことを表わしえない。次の例文が成立するのは、発話以後にkú ‘彼’が「気絶する」と想定されている時である。

b) künün kiçolhanta.
かれは きぜつするぞ

a)でøuk-とkiçolha-を入れ替えても文は成立するが、そうしてできた文はやはり程度表現文と解すほうが自然のように思える。

6 例文20のmiç'yø iss-はmiç'i+ø iss-と分析される。i+ø>yøは用言語幹と語尾にまたがる極めて規則的な縮約現象である。